

令和3年度第1回島田市認知症対策検討委員会

開催日時 令和3年8月5日(木) 19:00~20:10

開催場所 島田市保健福祉センター 研修室(3階) オンライン

出席者 【委員】

島田市医師会	小埜 聡司(会長)
島田市医師会	田口 博之(副会長)
榛原医師会	高木 勇人
地域包括支援センター(第一)	栗田 真理
地域包括支援センター(第二)	鈴木 伊津子
地域包括支援センター(六合)	鈴木 桂子
地域包括支援センター(初倉)	勝浦 麻美
地域包括支援センター(金谷)	塚本 里枝
地域包括支援センター(川根)	長谷川 諒
グループホーム(汽笛)	森下 隆利
デイサービス(合歓の家)	富岡 昌子
ケアマネジャー(ケアマネットしまだ)	相村 里子
認知症家族の集い(会員)	益田 佳江
認知症家族の集い(会員)	戸田 奈津子
民生委員	増田 隆男

15人

【事務局】

包括ケア推進課長	大塚 昌利
地域支援係長	米澤 美晴
主任保健師	持塚 安代
主事	曾根 翼

欠席者

島田薬剤師会	清水 雅之
榛原薬剤師会	進士 寿子

1 開会

2 包括ケア推進課長あいさつ

日頃は、当市の介護保険事業をはじめ高齢者福祉政策に、御理解と御協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

委員の皆様には就任につきまして、御快諾をいただきありがとうございます。

当市の状況をお話させていただきます。7月末、当市の人口は95,745人。65歳以上人口は30,640人となります。高齢化率は32.0%となっております。

今年の3月に3か年を計画期間とする第9次高齢者保健福祉計画を策定しました。計画に先だってアンケート調査を実施しましたが、その中で「高齢になって足腰が弱くなっても、物忘れが進んでも最期まで自分らしい暮らしを続けたい」と、思っている方が前回のアンケートより増加しています。認知症施策

につきまして、地域で暮らす認知症の人とその家族を支援するため、地域包括支援センターごとに、認知症サポーターと職域サポーターの協力のもと、チームオレンジを組織し活動を充実させていきたいです。

新型コロナウイルス感染症の感染が拡大しておりまして今月 8 日から、静岡県もまん延防止等の重点措置法の対象となっていく予定です。明日、静岡県から対象となる市町村が発表されると聞いています。こうした中での介護保険事業ですので計画とおり進んでいない現状があります。

この委員会は、市民の皆様が認知症やその予防について、理解を深めるための取組や認知症の方及び、その家族が安心して暮らせるための支援あるいは体制づくりを御協議していただく場です。それぞれの立場から活発な意見と議論をいただいて、認知症施策をより充実したものとしていきたいので、ご協力をお願いします。

3 会長・副会長の選任

小埜会長、田口副会長が選任された

4 会長あいさつ

WEB を利用した会議が去年の夏からとなって、こんなにも長く続くのかと思っています。来年の今もこのような WEB 会議が続いているかもしれない。コロナ感染状況が予測できない。この 1 年間で認知症となった人、認知症のご家族の人の問題点の話し合いをしていきます。

3 報告・検討事項

(1) 島田市の認知症施策について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料 1
事務局説明

(2) 地域包括支援センターの認知症施策に関する取組・・・・・・・・・・・・・・・・資料 2
各包括から説明

意見

委員) 日頃感じている事ですがコロナの影響でお孫さんの帰省や家族の県外移動のために、サービス利用を自粛してもらうことがあり、認知症の進行、介護負担の増加が考えられるため、ショートステイを長めに使用してもらうことを提案しています。昨年と変わってきたことは、抗原検査を受けて陰性なら利用ができるという事業所が増えてきた。認知症でマスクをつけてられない方、訪問中に何度も家族にマスクをつけるように言われて気の毒に感じる方もいます。予防意識が高い家族の方はストレスに感じていると思う。コロナ禍において家族で過ごす時間が増えて、介護の面でプラスになる人とマイナスになる人がいると感じる。家族間の関係を良好に保つことが大事になる。家族が認知症のことを理解することが重要だと思う。

委員) 昨年、母が施設入所した。コロナ感染防止のため面会ができなくなり、心配をしていた。早まって入所させてしまったかと悔やんでいた。今年になってから、施設において窓越しでの面会が 2 週間置きに可能となった。孫たちとスマホのテレビ電話で会うことができるようになった。孫を忘れてしまい認知症が進んだなあと思う。入所中に何かあったら困るなあと思う中で悔やんでいる。介護の仕事を 2 年しているが、家族は大変だなあという気持ちで働いている。母のことで精神面の負担もあり円形脱毛になった。コロナが早く収まってくれば、家に連れ帰ってきて美味しいものでも食べさせたい。離れてみて母への愛おしさ、ぬくもりを感じている。次世代の私たちも若年性アルツハイマーや認知症になる可能性はある。良薬ができればと願っている。

会長) 外来でも介護職員で自分の親も見ている方がいる。自分の親も見つて仕事の立場で介護も行

い、気持ち的にジレンマを感じると言われる方がいる。若年性のアルツハイマーの薬について、エーザイからアデュカヌマブが日本でも来年くらいに承認になる見込み。この薬は軽度認知障害 MCI から使える。実際ではどのようになるのか学会レベルでもわかっていない、手さぐりの進捗はしている。

委員) 地域活動がお休みになると出かける場所がない。地域のつながりがないと閉じこもりになってしまう。閉じこもりになると体の動きが悪くなる。人と関わらないと認知機能の低下につながる。意欲低下から認知機能低下になる。地域のつながりが途切れないようにしていくことが課題。感染予防の啓発と地域活動の継続に力をいれていきたい。

会長) 閉じこもりからフレイル、そこから認知症が悪化していく。今までデイサービスや通いの場を利用することで認知症の進行は防げていた。

委員) 川根包括の担当地域の人口が少ないこともあり、感染への意識が低い。不特定多数の集まる場所に関しては、体調確認、マスクの着用、検温、消毒を呼び掛けていきたい。認知症カフェや居場所や講座などを周知していきたいが、コロナ禍において大々的にできない。介護申請や話し合い等で家族に協力をしてもらいたいケースはあるが、家族が感染流行地域にお住まいで協力が難しい方もいる。2週間間隔を空けての対応に苦慮している。

委員) 半年前、80代前の母親と独身の50代息子の2人の家族。母親に電話をした知り合いから母親の受け答えから認知症を疑い、その方が知り合いに話をして私のところに連絡がきた。私も以前は会ったことのある人であったがコロナの影響で、約1年半位は話をするのがなかったので、最近の状態はわからない。検査を受けたらどうなのか、息子を通して話ができるのか、直接本人に話ができるのか認知機能の低下の判断がわからない。息子を通して病院で検査をしてもらったらどうなのか聞いてみる。本人はまだ車の運転をしている。家の前を通っても閉まっている様子がない。コミュニケーションをとる手段がない。その家族と連絡をとる方法を考えている。徘徊をしている、周りに迷惑をかけている様子も見られない。サポートする方法、良い案を教えてください。複数の方がその方の認知機能の低下を感じている。

委員) 県外の家族と電話でやりとりをしている。何らかの利用手段はないか。近くなら直接会うのはどうか。コロナ禍でなくても本人に検査を受けに行ったらと言うのは、難しい。例えば脳ドックを配偶者の方が受けに行く時に一緒に行かないか、という声掛けをしてみたらどうか。

委員) 直接の接触はコロナもあり難しい。電話やオンライン会議ができる方ならオンラインという方法もある。本人は認知症があるのかわからない。どういうふうに言動が奇異なのかまとめて、どなたが病院へ連れて行くのかは課題が残る。専門医につなげないと進行してしまいます。

会長) 民生委員の方々がこのような情報をまとめて、包括支援センターへつなげてみる。その後、介入が必要であれば認知症初期集中支援を利用することになるかもしれない。包括支援センターを集中にフォローアップする。ケースの拾い上げは難しいと感じている。

委員) 近々、別の要件で伺う予定があり、息子に会えるかもしれない。うまい声掛けがあるか。私も

1 年位話をしていない。認知低下の判断がわからない。うまい方法はないのかと考えている。

会 長) 私も受けましたから脳ドックを受けてみるのは、どうですかという声掛けはどうでしょうか。

委 員) 私もという言い方は良い。私も受けて良かったから、あなたも受けてみませんかと言ってみる。

委 員) 脳ドックというと大事な感じがする。簡単に認知症の検査の方法はありませんか。

会 長) 市でファイブ・コグをやっていませんか。

事務局) 定例で実施をしています。会場は保健センターだけではなく、初倉公民館、金谷北支所で実施をしている。広報で周知をしています。

会 長) 地域への働きかけはどうですか

委 員) 認知症カフェを月 1 回空き店舗を利用して、包括と地域の介護施設と協力しながら実施をしている。全国で 8 割近くの認知症カフェは、中止しているという新聞記事を目にした。大きな展開はできないが、介護相談や認知症相談をして理解をしてもらうには長く継続をしていくことが必要である。認知症への理解者を増やしていきたい。相談することが恥ずかしい、自分の家族内の問題として捉えている人がいる。相談できる窓口を知らせていく。継続していくことが大切。

委 員) 地域活動を休止している団体に対して、包括から団体代表者にアンケートをとっている。休止している地区の高齢者がどうなっているのか、団体代表者が把握をしているのか聞き取っている。まとめて包括でできることを考えていきたい。認知症カフェの新規開催は難しい。家族会の金谷いっぷく処は休止せずに行っている。大々的に宣伝ができない。継続的に参加してくれる介護者もいる。チーム茶っきりのメンバーが介護者の話を聞いてくれている。本人ミーティングを行いたいが、当事者の参加がない。

会 長) 今年度の目標に本人ミーティングとありますが、今のコロナ禍での実施は難しい状況。目標どおりに進めることが難しい時期。今後の感染状況をみながらお願いします。

委 員) 面会や外出の機会が減っていることが懸念される。直接会う機会が制限されるようであるのなら、それも懸念される状況である。

委 員) 高齢者のコロナワクチン接種が終わっている。感染しにくくなり、重症化しにくい状況である。特養の様子をみても、面会ができない状況は続いている。どうなったらコロナが流行する前みたいに施設入所者と、面会ができる状況になるのか悩ましい。施設入所の方は自分でマスクができない。マスクを外してしまう人もいる。入所施設に 1 人でも感染者がでると、感染が広がってしまい収拾がつかなくなる。打開策が見つかるとうい。

委 員) 家族の利用施設でコロナに感染した方がいて、2 週間施設を利用することができなかった。濃厚接触者で検査をしたが陰性であった。施設を利用できない間、入浴が 1 番困った。

入浴はできないので体を拭いて過ごした。週に2回、デイサービスに預けられるのはありがたいと実感した。

介護も10年位になり介護には慣れていると思っていたが、コロナの長期化で調子が悪くなり検査をしたら、ストレス性胃炎と言われた。気持ちはストレスを感じないようにしているが、身体は正直だなと思った。

委員) 包括ケア推進課の報告の中にありましたが、コロナの感染症治癒後であっても通いの場への参加を拒否されると言う話を聞いたことがある。コロナにかからないように啓発をしている。コロナにかかった後のこと、次のステップの情報提供をしていく必要がある。

地域の通い場は認知症があってもなくても、心の拠り所となる場所になる。地域共生になると良いなと思う。

会長) コロナに罹った後のケアが大切になる。

委員) 労働金庫の職員を対象に認知症サポーター養成講座を実施した。認知症と思われる方の窓口対応をすることが多いという話があり、どう対応をしたら良いのかと言う質問が多かった。

スーパーから相談もあった。スーパー、金融機関共に、コロナ禍に関わらず生活するなかで必ず行かなくてはならない場所である。

こういう方が来ているから対応をどうしたら良いのかと相談される。認知症の方を地域で支える気持ちのある方が増えている。連携の必要性を感じている。

委員) 認知症の相談が8月だけでも3件あった。コロナの影響で仕事がなくなり、自宅にいることから症状が進行。最初はMCIであったが半年間でアルツハイマーと診断され、家族が対応に苦慮しているケースがある。介護保険の制度がわからない。サービスの利用方法もわからず、包括の利用までにつながらないケースもある。包括につなぐまでの時間がかかる現状がある。

会長) 拾い上げの検討が必要ではないか

委員) コロナに罹らないようデイサービスでは消毒を適宜行っている。施設にはオゾン発生器を設置して体がきれいになるような対策を取っている。コロナ感染者がデイサービスででた場合の対応は不安があるが、できる限りの対応をとっていきたいと考えている。

4 閉会

事務局) 会長、委員の皆様ありがとうございました。オンライン会議はいかがだったでしょうか。

委員の皆様はそれぞれの立場で認知症に対してご尽力いただいている方々なので、コロナ禍においてもそれぞれ、今できることを継続してお願いします。

次回は3月頃を予定しています。詳細は後日連絡します。以上で令和3年度第1回認知症対策検討委員会を終了します。

ありがとうございました。